哲學研究　第百八十四號　第十六卷　第七號

永遠の今の自己限定

西田幾多郎

一

聖パウロスの「時が完了せられた時神が彼の息子を送つた」といふ語に對し、アウグスチヌスが時の完了とは何を意味するかと問はれた時、時が無くなることであると説明した。かゝる誕生には時といふ如きものはなくならなければならないのである。併しマイステル・エックハルトの云ふには、時の完了といふのは尙一つの意味がある。時及び幾千年かの間、時に於て起つた又起るであらうものを、現在の一瞬に引寄せることができれば、それが時の完了といふものである。それが永遠の今といふものであつて、そこに於て私が今物を見、音を聞く如く、新に鮮かに萬物を神に於て知

ると云ふことができるのである（Meister Eckhart, Von der Vollendung der Zeit）。プラトンはティマイオスに於て創造者が創造物に永遠性を附與することの不可能なるを見て永遠の動く影像を作つた、それが時であると云つて居る。プラトンがそこに永遠なるものと考へて居るのは生ぜず滅せざるもの、卽ち時を超越したものを意味して居るのであらう、永遠にあるものとして、變ずるものゝ始となり終となるものを意味して居るのであらう。そこでは過去もなく未來もなくすべてが現在であると考へることもでき、又過去も未來も同時に現在に於てあると考へることもできるかも知らぬが、寧ろ時といふ如きものを超越して時といふ如きものが意味を有たないと考ふべきであらう。永遠の今 nunc aeternum と考へられるものは、エックハルトの云ふ如く無限の過去と無限の未來とが現在の一點に於て消されると考へられるものでなければならない、神は創造の始の日の如く今も尙世界を創造しつゝあり、時はいつも新に、いつも始まるといふ意味でなければならない。

時とは固如何なるものであり、如何にして考へ得るものであらうか。時とは無限の過去から無限の未來に向つて進み行く無限の流と考へられる、直線的進行と考へられる。併し未來は未だ來らざるものであり、過去は既に現れたるものといへども

それは既に過ぎ去つたものであり、加之我々は何處までも過去の過去を知ることはできない。我々は唯現在を中心として過去未來を知るの外はないのである。現在を中心として記憶によつて過去と結合し、未だ來らざるものを豫感することによつて、過現未の關係が成立すると考へることができる。卽ち現在に於て過去として未だ終らざるものがあり、未だ來らざるものも既にその尖端を現して居り、現在に於てあるものが既に傾斜を有つて居る、否現在そのものが過去から未來への推移であるといふことから時の關係といふ如きものが考へられるのであると思ふ。併し變ずるものが知られるには變ぜざるものがなければならない、現在を中心として無限の過去、無限の未來といふものが考へられるには、無限の過去、無限の未來に通ずるものがなければならない。アウグスチヌスの如く過去、現在、未來といふものがあるのではなく、過去の現在、現在の現在、未來の現在といふものがあるのであり、現在が過現未を包むといふことができる。併し時が現在に於てあるといふことは時そのものを否定することでなければならない、時が何等かの意味に於て包まれると考へられる時、それは時といふものでなくならねばならない。時は無限の流でなければならない、而もその方向は絕對に翻すことのできない永遠の流でなければならない、時は一

瞬の前にも返ることができないと考へられねばならない、時の無限の行先と考へられるものが何等かの意味に於て包まれると考へられる時、時は繰り返し得るものとならねばならない。時は單に一定の方向を有つた連續といふ如きものではない、時の行先は包むものゝ外に出て行かなければならない、如何なる意味に於ても對象的に限定せられるものゝ外に出て行かなければならない。時の尖端は一瞬々々に消え行くものでなければならぬ、そこに時は永遠に返すことができないといふ意味があり、そこに現在は掴むことができないといふ意味があるのである。アウグスチヌスの如く時は現在に於てあると考へねばならぬ、而も斯く考へる時、時といふものはなくなるのである、時は自己自身に於て矛盾するのである。如何にしてかゝる時が自己自身を限定すると云ひ得るであらうか。

すべて有るものは何等かの意味に於て一般者に於てあると云ふことができる、即ち一般概念の外延の意義を有つて居るのである。それによつて何は何々であるといふ判斷が成立するのである、判斷は一般者の自己限定として成立するといふことができる。個物といふ如きものに至つては主語となつて述語とならないと云はれる如く、述語的一般者に於てあるといふことは云はれないと考へられるでもあらう。

併し個物といふものが考へられるのは一般者に於てあり、一般者の自己限定として考へられるのでなければならぬ。私は之を一般者の場所の自己限定といふのである。かゝる意味の限定は何處までも深めて行くことができる。個物といふのは尙主語となるといふ意義を有するであらう、變化といふ如きものに至つては主語として限定することもできないと考へ得るでもあらう。併しそれにしても何處までも限定せられた一般者に於てあり、何處までも有の場所的限定の意義を脱せないと云ひ得るであらう。時といふものが考へられるには、かゝる限定せられた一般者の自己限定といふ如きものゝ外に出なければならない。無にして、自己自身を限定するものゝ自己限定として、無の場所的限定として、時といふ如きものが考へられるのである。時は無限に移り行くものと考へられる、併し時は單に變ずるものではない、或方向に向つて無限に移り行くと云つても、それだけにて時といふものは考へられるのではない。斯く考へる時、現在といふものは何處までも、捕捉すべからざるものとなるのである。而も上に云つた如く現在といふものから過去と未來とが考へられるのである、過去から現在が限定せられるのではなく、現在が現在自身を限定することによつて、過去と未來とが限定せられるのである、現在といふものなくして時とい

ふものはない。かゝる意味に於て現在が現在自身を限定するといふことは、限定せられた一般者の中に無限に變じ行くものを考へることによつて可能なるのではなく、逆に限定するものなくして自己自身を限定するものゝ自己限定として考へられねばならぬ、時は自己自身に於て矛盾するものと考へられる所以である。限定せられた一般者に於てあるものとして矛盾といふものは考へることはできない、唯無にして有を包むものに於て矛盾といふものが考へられるのである。現在として摑み得た時そ、れは既に現在ではない、現在は摑み得ざるもの、矛盾は考へられないものと考へられるでもあらう。併し自己が自己自身を知る、卽ち自覺するといふことは、無にして有を限定するといふことであり、そこにいつも現在が現在自身を限定するといふ意味があるのである。アウグスチヌスも過現未は心に於てあると云つて居る。自己が自己自身を知る所、そこに現在があり、現在が現在自身を限定する所、そこに自己があるのである。自己の底には何物もあつてはならぬ、何物かゞ自己自身を限定すると考へれば、自己といふものはなくなる。現在の底には何物もあつてはならぬ、何物かゞあると考へれば、過去が現在を限定することゝなり、時といふものはなくなるのである。嚮にすべて有るものは一般者に於てあり、判斷的知識は一般者の自己

限定として成立すると云つたが、逆に一般者の自己限定といふのはその根柢に於てすべて自覺の意義を有つて居るといふことができる。ノエマ的なるものが主語的なるものであり、一般者の自己限定として判斷が成立するといふのは、自己が自己に於て自己を見るといふことを意味するに外ならない。唯、無にして自己自身を限定するものゝノエマ的自覺として、それが客觀的と考へられるのである。それで個物を包む場所的限定と考へられるものは無の自覺的限定の意義を有つたものでなければならない、個物といふ如きものは我々の自覺に基いて考へられるのである、個物的判斷の基にはいつも直覺的なるものがなければならない。アリストテレスの如く主語となつて述語とならない個物に眞理の根據を求めるといふことは、眞理が無の自覺によつて基礎附けられることを意味するであらう、アリストテレスのいふ如き意味に於て定義とはロゴスの自覺的內容を意味すると考へることができる。

それで現在が現在自身を限定することによつて時といふものが成り立ち、現在が現在自身を限定すると云ふに無が無自身を限定するといふことがなければならない、そこに我々の自覺の意義がなければならない。無にして自己自身を限定する一般者の自己限定として卽ち絕對無の自覺的限定として時といふものが考へられる

のである。すべて一般者の自己限定と考へられるものは絶對無の自覺的限定によつて基礎附けられ、之によつて包まれると考へることができるが、絶對無の自覺的限定として無にして自己自身を限定するもの、卽ち自己自身を限定する現在といふものが限定せられるのである。而も眞に自己自身を限定する現在といふのは摑むことのできない瞬間といふものであり、絶對無の自覺的限定として自己自身を限定する瞬間といふ如きものが限定せられるのであるそれが我々の自由なる人と考へるものであらう。絶對無の場所的限定として自由なる人といふ如きものが限定せられ、それは無にして自己自身を限定するものとして、我々の自己は自己の中に時を包み、各人は各人の時を有つと云ふことができる。普通には永遠の過去より永遠の未來に流れ行く絶對時といふ如きものが考へられ、我々は之に於て生れ之に於て死に行くと考へられる。併し上にも云つた如く、かゝる考へ方によつて眞の時といふものが考へられるのではない。時は自己が自己を限定することによつて、現在が現在を限定することから始まらねばならぬ、各人の自己のある所そこに各自の時といふものがあるのである。我が時に於てあるのでなく、時が我に於てあるのである、絶對時といふ如きものは考へられたものに過ぎない。絶對無の自覺のノエシス的限定

として卽ち場所的限定として先づ無にして自己自身を限定するものが限定せられる。眞に無にして自己自身を限定するものといふのは、自由なる人といふべきものであらう。絕對の無によつて限定せられるものは自由なる人といふ如きものでなければならない。此の如き意味に於て無にして自己自身を限定するものは、自己の中に無限の辨證法的運動を包む圓の如きものと考へることができる、自由なる人といふのは自己自身の中に時を包む圓環的限定といふことができる。パスカルは神を周邊なくして到る所に中心を有つ無限大の球 une sphère infinie dont le centre est partout, la circonférence nulle part に比して居るが、絕對無の自覺的限定といふのは周邊なくして到る所が中心となる無限大の圓と考へることができる(パスカルの如く球と考へるのが適當かも知れない、併し私は今簡單に圓と考へて置かう)。之によつて之に於て到る所に無にして自己自身を限定する圓が限定せられると考へることができるのである。斯くして絕對無の自己限定によつて之に於てあるものとして無數の人といふものが限定せられ、それ〴〵の現在を有つた無數の時といふものが成立すると考へることができる。すべての時を包み、現在が現在を限定する意味にて、すべての時を限定する絕對的現在ともいふべきものは、周邊なくして到る所に中心を

有つ絶對無の自覺的限定といふことができる。かゝる意味に於て絶對的現在と考へられるものは何處にても始まり、瞬間毎に新に、いつでも無限の過去、無限の未來を現在の一點に引き寄せることのできる永遠の今といふことができ、時は永遠の今の自己限定として成立すると考へることができる。眞に永遠の今といふべきものはプラトンの考へた如き永遠不變の意味ではなくして、その各の點に於て無限の過去未來を消すことのでき、之に於て何處でも何時でも時が始まると考へることのできる絶對無の自覺といふ如きものでなければならない。プラトンの所謂永遠の世界といふ如きものも之によつて之に於て限定せられるのである。周邊なくして到る所が中心となる絶對無の自覺面といふ如きものは、その各の點に於て時が始まると考へられると共に、それに於て時が消されると考へることができる、絶對の生の面は絶對の死の面でなければならない。絶對無の自己限定はそのノエシス的限定の意味に於て無數の時を包み、之によつて無數の時が成立すると考へられると共に、そのノエマ的限定の意味に於てはすべての時を否定すると考へることができる。すべての時を包むといふ意味に於て限定せられた絶對の現在といふものに於ては、時がなくなるのである。周邊なくして到る所が中心である圓の自己限定はすべてを包

む無限大の圓と考へることができる。そこには動もなく生もない、それはもはや現在といふべきものでもない、そこでは時といふものがなくなるのである。唯、かゝる無限大の圓といふ如きものが(我々の所謂對象界と考へて居るものが)絶對無の自己限定面であるといふことから、卽ちそれが永遠の今によつて限定せられた永遠の現在であるといふことから、絶對に無にして自己自身を限定するものゝ自己限定として所謂絶對時といふ如きものが考へられるのである、永遠の過去から永遠の未來に流れる絶對時といふ如きものが考へられるのである。併し上に云つた如く限定せられた一般者の自己限定として時といふものが考へられるのではない、對象界の自己限定としては時といふものは考へられない。時は無にして自己自身を限定する一般者の自己限定として考へられねばならない。而もかゝる意味に於て絶對時といふものが限定せられるといふことは、我々が瞬間の底に瞬間を摑むといふことでなければならない、摑むことのできない瞬間を摑むといふことでなければならない、周邊なき圓の中心が定まるといふことでなければならない、神の自覺なくしては不可能である。之に反し周邊なき圓の自己限定として無にして自己自身を限定する圓といふ如きもの、卽ち自己自身を限定する現在といふものが限定せられ、摑むこと

のできない現在が摑まれるかぎり、時といふものが成立するのである。而して我々は眞に無にして自己自身を限定するものとして、瞬間の尖端に於て眞の時に觸れると考へることができる、卽ち絕對時に接すると考へることができる、個人の尖端に於て神に接するといふことができる、そこに內的事實卽外的事實と考へられるのである。併し一旦現在が現在自身を限定すると考へられるならば現在は何處までも摑まれ行くと考へることができる、無のノエマ的自覺の方向に何處までも摑まれた現在の自己限定といふ如きものを考へることができる、一般的自己の自覺的限定といふ如きものを考へることができるのである。無にして自己自身を限定するものゝ自己限定は何處までも摑むことのできない瞬間の自己限定と考へられねばならぬが、それが自覺的に自己自身を限定し自己自身を見ると考へられるかぎり、そこに限定せられた現在の自己限定といふ如きものが考へられ、それに於てプラトンのイデヤの如き永遠なるものが考へられるのである。かゝる方向の極端に於て時なきものといふ如きものも考へることができるのであらう。

二

現在が現在自身を限定する所そこに自己があり、自己が自己自身を限定する所そ

こが現在である、永遠の過去より來るものは此に來り、永遠の未來に出てゆくものは此から出て行くのである、此に於て永遠の過去が消され、此に於て永遠の未來が始まると考へることができる。過去を消し過去を包むといふ意味に於てそれが理性と考へることができ、未來を始めるといふ意味に於てそれが自由意志と考へることができるが、限定するものなくして自己自身を限定するといふ意味に於て絶對に非合理的と考へることができる。かゝる自己と考へられるものはいづこに如何なる關係に於てあるものであらうか。

限定せられた一般者卽ち有の場所といふ如きものから出立して、かゝる一般者が自己自身の中に無限に自己を限定して行くと考へることもできる、換言すれば我々の對象界と考へるものはかゝる一般者の自己限定と考へられるものであり、對象界と考へられるものが無限に自己の中に自己を限定して行くと考へることもできる。併しかゝる考へ方を以てしては、上に云つた如く自己自身に矛盾するものを考へることはできぬ、從つて眞の時といふものを考へることはできない。とは云へ、斯く一般者が自己の中に無限に自己を限定して行くといふことは、既にそれが超越的なるものによつて裏附けられて居ることを意味してゐなければならない、有が無の自己

限定として無に於てあるといふ自覺の意味を有つてゐなければならない。絶對無限なる對象界の自己限定と考へられるものは絶對無のノエマ的限定と考へることができるであらう。絶對に無にして自己自身を限定するものゝノエマ的限定は自ら絶對無限の過程とならざるを得ない、絶對無限なる對象界と考へられるものゝ自己限定の極限に於ては絶對無の自覺的限定に觸れると考へることができる。かゝる接觸線に於て後者の立場から永遠の過去から永遠の未來に渡る絶對時といふ如きものが考へられるのである。所謂客觀的時といふ如きものは絶對無の自覺のノエマ的限定に沿うて考へられるものと云ふことができるであらう、卽ち對象界の自己限定に沿うて考へられるものであらう。對象界に卽して考へられる所謂歷史といふものは、かゝる時の意味に於て考へられるものでなければならない。對象的限定といふ立場から何處まで自覺的立場に接近して行つても歷史の立場に達することはできない、目的論的見方と歷史の立場とはその立場に於て區別せられなければならない。歷史といふものは唯、對象的限定を越えた無の自覺の立場に於てのみ考へ得るのである、故に歷史は辨證法的と考へられねばならない。併し我々の自己は單に歷史に於てあるのではない。對象的限定に沿うて考へられる歷史的時に於て

は何處までも現在に達することはできない、歴史的時には瞬間といふものはない。却つて現在が現在自身を限定するといふことから、限定せられた一般者を越えた無の自覺的限定といふものが成立し、かゝる立場から對象的限定線に沿うて客觀的時といふものが考へられるのである。故に我々は絶對無の自覺そのものを有せざるかぎり、卽ち神の自覺を有せざるかぎり、絶對時といふ如きものを限定することはできない。唯、行爲的自己として絶對無の自覺のノエマ的限定の意義を有するかぎり、我々は歴史に於てあり、又歴史的時といふ如きものが行爲的自己の自己限定の立場に於て考へられるのである。それで自己自身を限定する我々の眞の自己と考へられるものは、對象的限定に沿うて考へられる客觀的時といふ如きものをも越えてあるもの、卽ち歴史を越えたものでなければならない。我々の自由なる自己と考へられるものは、無限なる辨證法的運動を包む絶對無のノエシス的限定によつて基礎附けられて居るものでなければならない、場所が直に場所自身を限定するといふ圓環的限定によつて基礎附けられたものでなければならない。ノエシス的限定と考へられるものは場所が場所自身を限定するといふ意味に於て圓環的限定として内に無限の辨證法的運動を包むものでなければならない。故に我々の自由なる自己と

考へられるものは對象的限定に沿うて考へられる客觀的時の底に無限に深く自己自身を限定するものとして、卽ち瞬間を包むものとして考へられるのである。歷史の底に自由なる個人的自己といふものが考へられるのである。

アウグスチヌスは自己は自己自身を知るのみならず自己自身を愛すると云ひ、又我々は知らないものを愛することはできないと云ふ。何故に自己は自己自身を愛することによつて自己であり、如何なる意味に於て我々は愛するものを既に知つて居ると云ひ得るであらうか。對象的に既に知られたものは求め得られたものであり、知らうとするものは未だ知られたものではないと云はざるを得ない。併し我々の自己は限定せられた一般者の自己限定として限定せられるのではない、有の自己限定として自己といふものがあるのではなく、無の自己限定として自己といふものがあるのである。先づ場所の自己限定と考へられるものがあり、之に於て之によつて對象的限定といふものが成立すると考へられる。斯く考へられるかぎり、所謂對象的限定と考へられるものは既に我々の自覺に於てあり、或意味に於て知られて居ると考へることができる。我々は自愛に於て對象的に無なるものを愛するのである、知識的に知ることのできないものを求めるのである。而も求められるものが求

めるものであり、愛せられるものが愛するものであると云ふことから自愛といふものが成立し、無が無自身を限定するとして我々の眞の自覺といふものが考へられるのである。私の所謂場所が場所自身を限定するといふことは、積極的には自己が自己を愛するといふことであると云ふことができる。故に自愛といふのは場所自身の無媒介的なる自己限定として、絶對に非合理的といふことができ、我々の自己は自愛によつて非合理的に自己自身を限定するのである。かゝる自己限定が對象的には身體的限定と考へられるものであらう、自愛なき所に身體はなく、身體なき所に自愛はないのである。絶對に無なるものゝ自己限定として無の自覺と考へられるものは無限の辨證法的運動と考へることもできるであらう。之に於てあるものは自己自身に於て矛盾するものと考へることもできるであらう。併し周邊なき圓の自己限定の意味に於て無の自覺といふのはかゝる過程的限定を内に包むのみならず、之を越えて自己自身を場所的に限定すると考へることができる、無限の過程的限定は之に於て消されるのである。到る所が中心となる周邊なき圓の自己限定としては、到る所に無數の圓環的限定が成立すると考へることができる、卽ち永遠の今の自己限定として到る所に現在が現在自身を限定すると考へることができる。そこに

は面と面とが相觸れると考へることができる、絶對無の自覺の能限定面と所限定面とが相觸れると考へることができる、死の面卽ち有の面と生の面卽ち無の面とが相觸れると考へることができる、かゝる意味に於て無の場所的限定といふべきものが自愛と考へられるものである。その所限定面卽ち對象的有の面といふべきものが身體と考へられるものである、之に於てあるものは限定するものなくして自己自身を限定するものとしてすべて衝動的である。故に自愛のある所そこに身體があり、身體のある所そこが現在である。現在といふのは對象的限定から定まるものでない、我々の自己の自覺的限定から定まるのである。知識的に現在といふものが定められるのでなく、現在は自己が自己自身を愛する所に定められるのである。自己自身を限定する現在と考へられるものは自愛的自己と云つてよい、過現未を包む現在の自己限定と考へられるものは自愛的限定でなければならない。アウグスチヌスは此の三つのものは心に於てあると云ひ、それ等を記憶と直觀と期待とに歸して居るが、かゝる三つのものゝ統一としての我は我自身を愛する我でなければならない。以上述べた如くなるを以て、無の自覺的限定として之に於てあるものは、いつも二つの仕方に於て限定せられて居ると云ふことができる。或は限定するものなくして

自己自身を限定するものは二つの方向に於て自己自身を限定すると云つてよい。一つはノエマ的に自己自身を限定するものとして絶對無の自覺のノエマ的限定線に沿うて辨證法的に自己自身を限定するのである。之を直線的限定と考へることができる、所謂時間的に卽ち歷史的に自己自身を限定するのである、かゝる限定の意味に於て自己は行爲的と考へられるのである。もう一つは絶對無のノエシス的限定に沿うて圓環的に自己自身を限定して行くのである。自己自身を中心として辨證法的運動を包む意味に於て自己自身を無限大に擴げて行くと考へることができる。周邊なくして到る所が中心となる圓に於ては、到る所を中心として無限大の圓が成立すると考へることができる。周邊なき圓の自己限定として到る所に自己自身を限定する無の場所卽ち自己自身を限定する現在といふものが成り立つ。それは無の自覺に於て限定せられたものとして辨證法的に卽ち歷史的に自己自身を限定し行くと考へられなければならぬと共に、場所自身の自己限定として超越的に自己自身を限定すると考へることができる、辨證法的運動を內に包み之を超越すると考へられねばならぬ。周邊なき圓の自己限定としてはかゝるものが考へられねばならないのである。かゝる意味に限定せられた場所と考へられるものが、上に云つ

た如く身體と考へられるものである。身體と考へられるものは純なる精神的限定として考へられるものでもなく、又純なる物質限的定として考へられるものでもない、唯無の場所的限定として卽ち自愛的自己の自己限定として考へられるのである。摑むことのできない現在の底に考へられる個人的自己といふのは、自己自身を限定する或一點を中心とした卽ち自己自身を限定する瞬間を中心とした無限大の圓と考へることができるであらう。それで自愛といふのは周邊なき圓の自己限定と考へられる或一點から、辨證法的運動のノエマ的限定線に沿うて何處までも之を包むといふ意味に於て擴がり行く圓環的自己限定と考へることができる。併し(私は今此に自愛と他愛との關係について委しく論ずる暇はないが)他愛といふのは斯くして考へられるものではない、自愛と他愛とは正に相反する方向に於て考へられねばならない。社會愛、人類愛といふ如き他愛といふのは自愛の擴げられたものと考へられるであらう、所謂同情といふ如きものによつて自己は何處までも擴げられるものと考へることができる。併しかゝる意味に於て擴げられた愛といふのは何處までも擴げられた自愛であつて、眞の他愛ではない、ノエマ的限定線に沿うて之を包むべく擴げられた圓環的限定に過ぎない、唯自己自身を限定する現在が擴がつて行つ

たまでゞある。眞の他愛といふべきものは之と反對の方向に考へられなければならない。周邊なくして到る所が中心となる圓の自己限定と考へられるものは、一方にかゝるノエマ的限定の意義を有つたノエシス的限定をも否定する意義を有つてゐなければならない、ノエマ的限定線に沿うた圓環的限定をも否定する意味を有つてゐなければならない、然らざれば單に無限大の圓の自己限定といふのと擇ぶ所がないのである。我々が如何ともすることのできない絶大の自然といふ如きものに對した時、之を眞の客觀界と考へ自己もその一部に過ぎないと考へる。併し我々は或程度までは自然をも手段として使用することができる、自己の意志の命令の下に置くことができる。加之、若しカント哲學に於ての樣に、自然界と考へられるものも純我の綜合統一によつて成立すると考へるならば、自然界も或意味に於て我に於てあると云ふことができるであらう。すべて理性的なるものは我々の意志を以て如何ともすることができないと云つても、尙自己に於てあるものと云ふことができる。唯、私に對して如何ともすることのできないものは汝である、眞に私に對立し、眞に客觀的といふものは自然ではなくして汝でなければならぬ。ノエマ的限定を沒したノエシス的限定といふべきものは私と汝との關係でなければならぬ、周邊なき圓の

自己限定として到る所に限定せられる圓と圓との關係は私と汝との關係でなければならない。周邊なき圓の自己限定として無數の圓が成立するといふことは人格が人格に於て成立するといふことを意味するであらう。而して何處までも無が無自身を求め無が無自身を限定することが眞の愛といふべきものであり、自愛といふのも斯く考ふべきものであるとすれば、周邊なき圓の自己限定といふべきものは絶對の愛と考へることができ、絶對の愛によつて私と汝とが限定せられると云ふことができる。眞の自愛は他愛であり他愛はその實自愛である、そこに汝自身の如く汝の隣人を愛せよといふ語の意義が理解せられるのである。對象的限定に沿うて自己自身を限定するといふ自愛から何處まで行つても他愛は出て來ない、而してそこに眞の人格的自愛といふものもないのである。眞の愛はかゝる方向の否定でなければならぬ、故に眞の愛はケエルケゴールが "Leben und Walten der Liebe" に於て云つて居る如く「汝は愛せざるべからず」である。「私は右の如くノエマ的限定を越えた周邊なき圓の自己限定卽ち場所が場所に於てあるといふ如き場所自身の自己限定の意味に於て、表現的限定といふ如きものをも見ることができると思ふ。ノエマ的限定を越えた立場に於て客觀的なるものは、すべて汝でなければならぬ、我に對して

立つ客觀的歷史といふものも汝でなければならぬ。併し歷史はノエマ的限定線に沿うて考へられたものである、更にかゝる限定をも越えた立場に於て客觀的なるものは單に自己自身を表現するものとなるのである。」

三

すべて絕對無の自覺的限定として之に於てあるもの、卽ち眞に具體的有といふべきものは、上に云つた如く直線的と圓環的との二樣の意味に於て自己自身を限定すると考へることができる。周邊なき圓が自己自身を限定すると考へられる時、先づ無限大の圓として自己自身を限定すると考へられ、それに於て到る所が中心として無數なる無限大の圓が限定せられると考へることができる。かゝる中心ともいふべきものが自己自身を限定する瞬間と考へられるものである、絕對に無なるものゝ自己限定として瞬間といふものが限定せられるのである、永遠の今の自己限定として到る所が今となると云つてよい。併し一つの中心を有つた無限大の圓といふ如きものは、絕對無の場所的限定卽ち周邊なき圓のノエシス的限定として之に於てあるものであつて、そのノエマ的限定面といふものではない。周邊なき圓の自己限定面としては、何處までも中心を否定する、中心のない圓といふ如きものが考へられね

ばならない。到る所が中心となる周邊なき圓はノエマ面としては絶對的に中心否定の圓として自己自身を限定するのである。何處までも中心のない絶對の死の面といふ如きものが絶對無の自覺のノエマ面と考へることができ、到る所が中心である絶對の生の面といふ如きものがそのノエシス面と考へることができるであらう。絶對無の自覺に於ては無が無自身を見るとして、映す面が映される面であり、此兩面は一といふべきであるから、之に於てあるものは何處までも辨證法的と考へられねばならない。兩面の對立から云へば兩面の接觸する所に辨證法的なるものが成立すると考へることができ、辨證法的に自己自身を限定するものから云へば、自己自身は相反する兩面に屬するものとして、一方に絶對の死の面を望み、一方に絶對の生の有を見ると考へることができる、而も後者が前者を包み死が卽生であるといふ所に、辨證法的なるものが考へられるのである。辨證法的運動といふのは唯ノエマ的に面が卽無であるといふ如きことによつて成立するのではなく、その根柢に無が無自身を限定する卽ち場所が場所自身を限定するといふことがなければならぬ、私の所謂圓環的限定がなければならない。無の自覺として具驗的有と考へられる我々の自己といふものがそれ自身に於て矛盾であり、辨證法的と考へられるのも、自己が自

己自身を愛するといふことに基かなければならない。單に知る自己より矛盾の起り樣もない、單に知る自己といふ如きものは眞の自己でないのである。自己の底には深い非合理的なるものがなければならない、非合理的なるものが合理的である、否非合理的なるものゝ自己限定によつて合理的なるものが成立することが辨證法的といふことでなければならない。眞の自己の存在はその理性的なるにあるにあらずして、その感官的なるにあるのである、その肉的なる所にあるのである。而も單に肉的なるものは物質と擇ぶ所はない、唯肉の底に靈を見る所に自己といふものがあるのである。故に自己の存在そのものが矛盾である、理性的自己が理性的自己たるにも、その底に非合理的なるものがなければならない、理性的自己は稀薄なる自己である。かゝる意味にて肉の底に自己自身を限定する靈、否肉そのものを卽靈となすのが眞の自愛的自己といふものであり、かゝる自己の自己限定が自愛と考へられるものである。而して自己自身を愛する自愛的自己の自己限定と考へられるものは無の場所の自己限定といふべきものでなければならない。感官的なるものが卽靈的であるといふことは、それが無の場所的限定であつて無の場所に於てあると云ふことでなければならない、限定するものなくして自己自身を限定するといふことで

なければならない、事實が事實自身を限定するといふことでなければならない、外が卽ち內といふことでなければならない、非合理的なるものが卽合理的といふことでなければならない。私が非合理的なるものゝ自己限定といふのは、何か知ることのできない深い或物があつて、それが自己自身を限定するといふのではない、限定するものなくして自己自身を限定するといふことである。潛在的に不可知的なる或物と考へられるものはオンに對するメ・オンたるに過ぎない、かゝる考そのものが事實が事實自身を限定する意味に於て成立するのである。それで我々の自己と考へられるものは場所的限定として卽ち圓環的限定として成立し、而も周邊なき圓の自己限定として絕對否定の死の世界卽ち絕對に中心否定の圓を自己限定面となすといふ意味に於て、辨證法的に卽ち直線的に自己自身を限定すると考へられるのである。場所が場所自身を限定するといふ意味に於て絕對の死の面と生の面とが相觸れると考へられる所に身體といふものが考へられ、そこに辨證法的に自己自身を限定する身體的自己といふものが成立するのである。それが相反する兩面の間に於てあるものとして、その何の面に近づくかによつて種々なる自己が成立すると考へることができる。その兩端に於ては相反する意味に於て身體なき自己といふ如きもの

を考へることができるであらう、そこに我々の自己が自己自身の身體を失ふと考へることができるのである。而して絶對無の自己的限定として具體的有といふべきものは、すべて我々の自己といふ如き意味を有つたものであり、辨證法的限定の相反する兩端に於て、一は辨證法を否定する意味に於て一は之を包む意味に於て辨證法的限定を離れたものを考へることができる、卽ち相反する意味に於て時なきものを考へることができる。抽象的有とか一般的自己とかいふ如きものはかゝる意味に於て考へられるものである。

到る所が中心となる周邊なき圓の自己限定に喩ふべき絶對無の自己限定面卽ちそのノエマ面ともいふべきものは中心なき圓と考ふべきであらう。無の場所的限定として之に於てあるものはかゝる限定面に於て自己自身を限定すると考へることができる。それは所限定面と能限定面とに對して如何なる關係に於て立つであらうか。周邊なくして到る所が中心となる圓の自己限定として之に於てあると考へられるものは、或一つの中心を有つた無限大に擴がる圓と考へることができるであらう。かゝる中心が我々の個人的自己と考へられるものであり、そこに瞬間が瞬間自身を限定すると考へることができる、そこに自己自身を限定する時が成立する

と考へることができる。かゝる自己と考へられるものは中心否定の圓卽ち絕對無のノエマ面からは何處までも否定せられる、卽ち自己自身の中心を失ふと考へられると共に、又何處までも之を包む意義を有すると考へることができる。時は永遠に消え行くと共に又永遠に生れ出るものである。自己は何處までも對象界から限定せられると考へられねばならぬと共に、自己は何處までも對象界を限定する意義を有つて居る。何處までも對象界を包むといふ意味に於てはそれは行爲的と考へられ、何處までも對象界から限定せられるといふ意味に於てはそれは感官的と云ふべきである。中心否定の圓卽ち絕對無のノエマ的限定面から云へば、すべての中心的限定は否定せられると云ふべく、私の所謂限定せられた一般者と考へるものはすべて之によつて裏附けられて居ると云はなければならない。限定せられた一般者の自己限定を破つて、無の自己限定として之を包む意味を有つて、之に沿うて考へられる「時」といふものは、つまり中心否定の圓の自己限定卽ち絕對無のノエマ的限定に沿うて考へられるものでなければならない。而も時は何處までもかゝる圓を包むことはない、中心を有つた圓は中心のない圓を包むことはできない、中心的限定は非中心的限定からして何處までも否定せられると考へられねばならない。非中心的限

定の立場からは自己自身を限定する現在といふ如きものは何處までも否定せられて行く、我々の自己は何處までも否定せられて行かねばならない。時は老い行くのである、我は死に行くのである、一瞬の過去にも返ることのできない永遠なる時の流といふものは斯くして考へられるのである。併し非中心的限定と考へられるものは固到る所が中心である周邊なき圓のノエマ的限定に過ぎない。中心的限定は何處までも非中心的限定によつて消されるのではない。時は何處までも蘇るのである、我々の一瞬々々が死であると共に生である、啻に一瞬々々に蘇るのみならず圓環的限定として時を包む意味を有つのである、過去を翻す意味を有つのである、プラトンの如く瞬間は時の外にあると云ふことができる、背理的ではあるが未來が過去を限定すると云ふことができる。中心否定の圓の自己限定といふ如きものは、唯、到る所が中心である圓のノエマ面としてのみ考へられるのであるから、斯く云ふことができるのである。かゝる意味に於て時を包んだ瞬間の自己限定といふべきものが行爲と考へられるものであり、その底には圓環的限定として自己自身を愛するものがあるのである。而もそれが永遠の過去から永遠の未來に流れる時の限定に對して單に知的にして知覺的と考へられるのである。知覺的と云つても瞬間的限定の

尖端に於て內的知覺卽外的知覺として唯、事實が事實自身を知る事實感とでも云ふべきである。一つの中心を有つた無限大の圓として絕對無の自覺のノエマ的自己限定に沿うて考へられるものは以上の如く考へねばならないが、更に場所が場所自身を限定するといふ意味に於て場所の無媒介的自己限定といふものを考へることができる卽ち圓環的限定といふ如きものが考へられなければならない。所限定面卽能限定面と考へられる時、死卽生として辨證法的と考へられるであらう。併し辨證法的運動と考へられるものは固限定するものなくして自己自身を限定する絕對無の過程的限定として成立するものであり、その根柢には絕對無の場所的限定として之を包む立場がなければならぬ。それが無が無自身を限定する絕對無のノエシス的限定として絕對の愛といふ如きものでなければならない、之に於ては辨證法的運動も消え行くと考へることができる。かゝる絕對愛の立場に基礎附けられて抽象的なる場所的限定といふものが成立すると考へることができる。それで無媒介的なる場所の自己限定と考へられるものは、いつも愛の自己限定に基礎附けられねばならない、人と人との直接なる結合に基礎附けられねばならない。絕對無のノエシス的限定と考へられるものは愛の自己限定といふべきであらう。掴むことので

きない現在を摑むものは愛である、愛によつて摑まれた現在といふ如きものが成立するのである。而してかゝる現在の自己限定と考へられるものが我々に一般的自己と考へられるものである。我々に共通なる世界といふものが構成せられるには、その底に廣義に於て社會的自己といふものがなければならない(社會我なくして現在といふものはない)。個人といふものを一つの中心を有つた無限大の圓と考へるならば、社會我と考へられるものは周邊的に限定せられた圓と考へることができるであらう。それで社會我といふものはいつも對象界を包む意味を有つて居る、卽ち行爲的意義を有つて居るのである。場所が場所自身を限定するといふ意味に於ては一つの面が能限定面と所限定面との意味を有つてゐなければならない、一つの圓は兩樣の意味に於て限定せられてゐなければならない、兩面の接觸面と考へられねばならない。社會我は一種の身體を有つたものである、所限定面に卽して考へられる自己限定の意味に於てはそれは歷史に於てあり、歷史によつて基礎附けられると考へられねばならない、絕對無のノエマ的限定に沿うて考へられるノエシス的限定の內容が歷史と考ふべきである。併しそれが能限定面的限定としては卽ち愛の自己限定としては、所限定面は能限定面の內に包まれ之に沒入する意義を有し、そこに

歴史を越え辨證法的運動を止揚する意義がなければならない。愛の自己限定に於て我々は歴史を越えて永遠なるものゝ内容を見るのである。愛の自己限定に於ては自己に對するものは又自己として限定せられるのである、對象的限定が卽自己限定となるのである、客觀が主觀の中に沒入するのである。過現未を包む現在の自己限定とは、卽ち無にして自己自身を限定するものゝ自己限定とは、場所が場所自身を限定するとして愛の自己限定といふべく、之に於て時を越え歴史を包むといふことができる、卽ち愛の自己限定に於て我々は永遠に現在なるものゝ内容に觸れると云ふことができる、かゝる愛の自己限定を直觀と考へるのである。行爲の底には自己自身を愛するものがなければならぬ、行爲とは自己自身を愛するものゝ時に沿うた自己限定に外ならない。我々は行爲によつて時を包み得たと考へられる時、そこに直觀といふものが成立するのである、直觀は行爲の自覺といふことができる。かゝる直觀の内容が永遠に現在なるイデヤといふことができる、イデヤは愛の内容といふことができる(藝術は愛に基くのである)。故に場所が場所自身を限定するといふ意義を有する社會我の自己限定の内容と考ふべきものは、何等かの意味に於てイデヤ的でなければならない、社會我の自己限定によつてイデヤ的内容が見られると云

ふことができる。そこにそれが歴史を越えてある意義があるのである。

愛に於ては自他合一し、他に於て自己を見るのである。絶對無の場所的限定たる絶對の愛に於ては、すべてが自己となり、すべてに於て自己を見ると云ふことができる、周邊なき圓の到る所が中心であると考へることができる。かゝる限定に於ては、一方に時を包む意味を有するを以て、廣義に於て行爲とも考へられると共に、一方に物に於て自己を見ると云ふことができ、愛のノエマ的限定は直觀と考へることができる。愛の自己限定として自己自身を限定する場所が限定せられるといふこと、卽ち有限なる圓環的限定が成立するといふことは、そこに一つの直觀が成立するといふことを意味すると考へることができる、絶對無の自己限定といふのは根本的には自己自身を見て行くことであると云ふことができる。いつも又到る所に生れる永遠の今の自己限定を絶對の愛と考へるならば、限定せられた今の自己限定と考へられるものは直觀と云ひ得るであらう。過現未を包む現在の自己限定といふのを愛の自己限定と考へるならば、現在が現在自身を限定するといふ意味に於ては、それを直觀と考へることができる。而してそれは永遠の今の自己限定として、そこに我々は永遠なるものゝ内容に觸れると考へることができるであらう。それが時の充實

と考へられるものでなければならない。時の充實の方向に於ては時がなくなるのではない、時が包まれるのである。眞に永遠なるものといふのは單に變ぜないものと云ふのではない、現在が現在自身を限定する意味に於て內から自己自身を限定して行くものを意味するのである(Plotin, Über Ewigkeit und Zeit)。現在が現在自身を限定し行くといふ意味を有する行爲に於て、我々が永遠なるものゝ內容に觸れると考へられるのも之が爲でなければならない。かゝる意味に於て自己自身を見て行くといふことは個人的自己に於てその極限に達するのである、絕對無の自覺に於てあるものは一つの中心を有つた無限大の圓といふ如きものに至つて、その極限に達すると考へざるを得ない、かゝる極限に於て死の面、卽生の面として辨證法的限定といふものが考へられるのである。併し中心なき圓は到る所が中心である圓の限定面として之を包むといふ意義を有するを以て、更に之を越えた立場といふものを考へることができる。かゝる辨證法的運動を包むといふ立場に於てノエシス的方向に自由意志といふ如きものが考へられると共に、そのノエマ的方向に中心なき圓の限定面的內容として單なる表現の世界といふ如きものが考へられるのである。後者に於て自己といふものはない、それは無自覺の世界である。自由意志の底に我々は

時を越えたもの、卽ち神に接すると考へ得るならば、表現の方向に於ては時がなくなると考へることができる。中心なき圓といふ如き絕對の否定面に於ては時とか自己とかいふ如きものはなくなると考へざるを得ない、そこは絕對の死の世界でなければならない。表現の世界といふのは死を以て覆はれたる生の世界である。我々が行爲的自己の立場から出立して自己自身を限定して行くと考へるならば、我々は如何ともすることのできない對象面に撞着すると考へざるを得ない、そこに我々は我々の自己を失ふと考へるのである。併し行爲の底には自己自身を愛するものがなければならない、行爲的に如何ともすることのできないものも愛の範圍に於てあると云ふことができる、卽ち欲望の對象界に於てあると考へることができる。行爲的自己の自己限定の立場から云へば、物が欲望の對象となると考へることもできるが、逆に對象界からは愛の對象界の中心と考へられるものが自己であり、行爲とはかかる對象界の自己限定と考へることができる。上に云つた如く愛とは物が我であり、物に於て我を見ることである。アウグスチヌスの如く我々は知らざるものを愛することができないとすれば、愛に於ては物が既に我に於てあり、物の自己限定が我の自己限定と考へることができる。かゝる考を推して、行爲的自己が自己自身を失

ふと考へられる時、卽ち中心を有つた無限大の圓の中心が中心否定の面によつて消されると考へられる時、中心なき圓の自己限定として表現の世界といふ如きものが成立するのである。かゝる世界の成立にはその底に他愛がなければならない。行爲的自己の自己限定といふのは自愛と考へられるものであり、行爲的自己が自己自身を失ふと考へられる時、我々は他愛に入るのである。前に云つた如く他愛は自愛の擴げられたものでなく、その否定にあるのである。對象的限定線に沿うて之を包むべく考へられたものが自愛であり、かゝる方向を否定して汝を包むのが他愛である。眞に對象界を自己の內に見る時、對象界が自己の中に沒すると考へられる時、更に自己に對するものはもはや物ではなく汝でなければならぬ。かゝる對立に於て私がなくなると考へられる時、すべてが汝である。場所と場所との對立は私と汝とでなければならない、絕對の愛の立場からは中心否定の圓と考へられるものも汝の意味を有つたものでなければならない。自愛的自己が自己自身を失ふといふことは他愛に入るといふことであり、他愛に入るといふことは自愛の方向を否定する絕對の愛の立場に結び付くことを意味するのである。斯くして中心のない圓が無自覺的と考へられる表現の野と云ふ如きものとなるのである。唯、場所が場所自身を

限定する意味に於て所謂他愛的自己の自己限定として、廣義に於ける社會的自己卽ち一般的自己といふものが成立するかぎり、それが過現未を包む現在の自己限定卽ち愛の自己限定として、之に於て時が充實して行くと考へられるのである、永遠なる今の自己限定としてイデヤ的なるものが見られるのである。表現的自己の自覺的限定といふのはかゝる意味に於て考へられるものでなければならぬ。我々の思惟的自己と考へられるものは無自覺的なる表現面が自覺的意義を有つ所に成立するのである。それは自覺的意義を有つた無自覺的なる表現面の自己限定ともいふべきであらう、ノエシス面的限定としてはそれは行爲の意義を有つと考へることもできる。併しそれは愛を中心とした社會的自己の自己限定といふ如きものではない、寧ろそれを否定する意味を有つたものと云ふことができる、それは絶對愛のノエマ的限定に裏附けられたものと考ふべきであらう。

絶對無の自覺的限定といふものをそのノエマ面限定から見れば、絶對時の自己限定と考へられるのであらう。限定せられた一般者を越えて無にして自己自身を限定するものを考へる時、それは中心なき圓の自己限定とも考ふべきものであらう、之に於て所謂客觀界と考へられるものが限定せられる。併しノエシス面的限定とし

て之に於てあると考へられる我々の自己はかゝる限定面に於てあるのではない、之を越えてあるものである、時によつて限定せられるのではなく、却つて永遠の今の自己限定として時を限定するのである。絶對時と考へられるものは、唯、死卽生なる時の否定的方向に中心を置いたものに過ぎない。絶對無の自覺的限定として眞に具體的有と考ふべきものは、永遠の今の自己限定たる我々の個人的自己といふものでなければならない。その一々が一つの中心を有つた無限大の圓として自己自身を限定すると云ふべきである。故に我々の自己は所謂歷史に於てあるのではない、唯ノエマ的に歷史に於て自己自身を限定するのである。すべて絶對無の自覺的限定として之に於てあるものは、その限定面に於て自己自身を限定すると考へねばならない、我々の自己はそのノエマ的限定に沿うて絶對時に於て自己自身を限定すると考へられるのである。單なる限定面的內容としては所謂自然といふものが考へられるであらう。身體的自己としては我々は自然に於て自己自身を限定し、又自然によつて自己自身を限定せられると考へねばならぬ。併し行爲的自己としては歷史に於て自己自身を限定するのである。以上は絶對無のノエマ的限定の立場から見たのであるが、卽ち知識的見方であるが、そのノエシス的限定の立場から見れば、卽ち

情意的見方よりすれば、私に對するものは汝でなければならない、すべての對象的關係は私と汝との關係でなければならぬ。現在が現在自身を限定するといふことが、自己が自己を限定することであるといふのは、自己が自己を一つの人格として限定するといふことでなければならない。私が一つの人格として自己自身を限定するかぎり斯く云ひ得るのである、眞に無と無とを結合する無の自己限定と考へられるものは人格的統一でなければならない、直線的限定を包む圓環的限定といふのはかゝるものでなければならない。それで絶對無のノエシス的限定によつて基礎附けられた私といふものから見れば、絶對無のノエマ面といふものは汝といふものでなければならない。而もそれは絶對無のノエマ面として絶對に私を否定する意味を有つたものでなければならない、かゝる意味に於て表現の世界といふ如きものが考へられる。それは私に不可知的な汝であり、或は未だ自覺せない客觀的自己である。併し中心のない圓は固到る所中心たる圓のノエマ面として之に於てあるものでなければならない、かゝる意味に於てはそれは大なる客觀的自己でなければならない。所謂意識一般といふ如きものもかゝる意味に於て考へられるものであらう。それは表現的自己の自覺と考へることもできる、到る所中心である圓がそこに始めて自

己自身を圓環的に限定すると考へることができる、卽ち自己自身を見る意味を有つて來ると云ふことができる。かゝる限定も固、絕對的愛の自己限定によつて基礎附けられるものとして、此の私と同じく一の自己であり、私に對して汝の意味を有つたものでなければならぬ。併しそれはノエマ的限定として全然知的であり、その內容は單に自然と考ふべきものである。身體的自己としては我を殺すに一滴の水を以てして十分であるが、一つの人格として全宇宙を以てしても我は之を知る故に貴いといふことができる、而も兩者共にノエシス的限定としては、絕對の愛に於ては我と自然とは兄弟でなければならない。ノエシス面がノエマ面を包むといふ意味を有つた時、表現的自己が自覺的となり、意識一般の意味を有つて來ると云つたが、更にノエマ面がノエシス面の內に包み込まれ、無が無自身を見るといふ意味を有つた時、表現的自己の自己限定と考へられるものは社會的自己の意義を有つて來なければならない、卽ち人格的意義を有つて來るのである、それは私に對して汝である。それは絕對無のノエシス的限定の意義を有するノエマ面として我々をノエマ的に限定する意味を有すると共に、我々の自己はノエシス面的限定として我々は社會に對して自由であり、却つて社會は我々によつて構成せられると考へることができる。更に

ノエマ面がノエシス面の中に沒入したと考へられる時、そこにもはや社會的自己といふ如きものもない、汝として私に對するものは唯、神である。我々は個人的自己の尖端に於て自由意志として直に神に接するのである。ノエシス的には斯く神に接すると云ひ得ると共に、ノエマ的には社會的制約を離れて自己と同一の自由なる人を見る、人と人と相對するのである。ノエマ面的限定として汝といふものがなくなる時、ノエシス卽ノエマとなる、我々は各の人に於て神を見るのである、汝自身の如く汝の隣人を愛せよといふ聲もそこから出て來るのである。かゝるノエシス的限定の世界を一つの社會と考へるならば、それは神の國といふべきものであらう、カントの目的の王國といふ如きものも斯くして考へられるものでなければならない。かゝる絕對無のノエシス的限定に對してそのノエマ的限定と考へられるものが歷史の世界といふ如きものである、社會我と考へられたものは此に於て歷史我の意味を有つて來るのである、ノエマ的には我々は之に於てあり之によつて限定せられると考へられる。而も絕對無のノエマ的限定として歷史の底に無限に非合理的なるものがある、歷史をも消すものがある、かゝる絕對の死が絕對の愛に於て絕對の生であると考へられる所に神の國といふ如きものが考へられるのである。對象的認識の

立場としては我々はノエマ的限定から考へるのであるが、ノエマ的限定はいつもノエシス的限定によつて基礎附けられてゐなければならぬ。絶對無の自覺の最も根本的なるノエマ的限定の内容と考ふべきものは自己自身を限定する事實といふ如きものであらう、原始歴史の事實といふ如きものであらう。到る所中心である圓の自己限定の内容と考ふべきものは此の如き非連續の連續の事實といふ如きものでなければならない。ノエマ的にはその底に絶對に非合理的なるものを考へなければならない、それは未だ所謂自然といふ如きものではない。而もそれが絶對に非合理的なるが故に絶對に無であり、絶對に無なるものゝ自己限定として、それは絶對の愛といふべきものでなければならない。そこではノエシス卽ノエマとして、それは未だ自然でもなければ汝でもない。併しそれが絶對の自覺としてその自己限定の内容が自己自身を限定する事實そのものと考へられるのである、それは私の所謂原始歴史の事實といふ如きものでなければならない。我々は自然に於て非合理的なるものに撞着すると考ふべきではなく、歴史に於て眞に非合理的なるものに撞着するのである。かゝる意味に於ける事實の世界はノエマ的に自己自身を見る意義を有し、而もそれが見られないと考へられる時、所謂歴史といふものが考へられ、それと

共に上に云つた如く自然といふ如きものも考へられるのである。此等のものはすべて原始歴史の世界の自己限定の意義を有つて居るのである、絶對無の自覺の兩面の間に挾まれて居るといふことができる、そのノエマ面的方向にイデヤが見られ、そのノエシス面的方向に事實が見られる。イデヤとは事實の自覺的內容たるに過ぎない、それは限定せられた現在の內容として非實在的と考へられるが、その底にはいつでも自己自身を限定する今の自己限定として事實的なるものがなければならない。而してかゝる事實を限定するものは絶對無の自覺に接するものとして、我々の個人的自己といふ如きものでなければならない。個人的自己と考へられるものは絶對無の場所に於てある最後のものとして、それから見てそのノエマ的方向とノエシス的方向とに一般的自己といふ如きものが見られるのである。

四

上より述べて來た如く永遠の今の自己限定によつて絶對無の自覺の對象界が限定せられるとすれば、そのノエシス的限定と考へられるものは絶對の愛の自己限定と考ふべきであらう。辨證法的運動の背後には之を包むものがあるのである、之を

止揚するものがあるのである。すべて無の自覺に於てあるものはその背後に圓環的限定がなければならない、卽ち場所が場所自身を限定するといふ意味がなければならない。それが愛の自己限定といふべきものである、物の存在性は之によつて限定せられるのである。絕對愛の自己限定によつて人格的世界といふものが限定せられ、之に於てあるものとして無數の個人的人格といふものが限定せられるのである、個物といふ如きものもかゝる限定によつて基礎附けられるものでなければならない。愛の限定といふ如きものによつて認識對象を基礎附けると考へるのは知識の客觀性と相容れないと云はれるでもあらう。併し場所が場所自身を限定するの意味なくして所謂意識現象といふものを考へることはできない、すべて精神科學的知識の成立の根柢には多少ともかゝる限定の意義を考へねばならない。加之、自然科學的認識を基礎附ける自己自身を限定する事實そのものといふ如きものも、かゝる限定によつて基礎附けられると云ふことができる。非連續の連續として事實そのものと考へられるものは、かゝる限定の內容でなければならない。斯くして認識對象の世界から藝術、道德、宗敎の對象界への推移も考へることができるであらう。從來あまりに知情意の抽象的區別に捕へられて、具體的なる物の見方といふものが

疎にせられて居るではないかと思ふ。自己自身を愛するといふことなくして自覺といふ如きものはない、愛の自己限定によつて具體的對象といふ如きものが限定せられるのである。ヘーゲルの辨證法といふものは物の具體的見方といふことができるが、私は更に愛の自己限定を加へることによつて之を完全にし得ると思ふのである。

記憶なくして我といふものはない、併し記憶は如何にして成立するのであらうか。記憶の內容は固、連續的でなければならない。併しかゝる連續は如何にして可能であるか、昨日の我と今日の我とは如何にして結合するか。かゝる結合の根柢を外に求めれば腦の存在に求めるの外はない、併しそれは唯、一種のヒュステロン・プロテロンたるを免れない。之を內に求めればライプニッツの極微知覺の如きものを假定するの外はない、而もそれは單なる假定たるを免れない。記憶といふものは無の自己限定によつて成立すると考へざるを得ない、私の所謂圓環的限定によつて成立すると考へることができる。かゝる限定に於て直線的連續が限定せられ、それが我々の內的連續と考へられるのである。記憶に於て既に非連續的なるものゝ連續といふ意義がなければならない、單なる事實の連續と考へられるものが之に於て限定せ

られるのである。かゝる記憶の底にあつて無にして自己自身を限定すると考へられるものは何であるか。それは自愛的自己と考へられるものでなければならない、自愛的自己といふ如きものが記憶を限定し又その想起の方向を決定するものでなければならない。我々はかゝる自己を本能的と考へ自愛的自己の底に非合理的なるものを考へる。併しかゝる非合理的なるものゝ自己限定によつて人格的自己といふものが考へられるのではない。人格的ならざる自己はない、我々は我々の人格的自己を愛するのである。かゝる自己の底には合理的なるものも之に於て限定せられるが故に非合理的と考へられるものがなければならない、それが私の無の自己限定と考へるものである。今日の我に對する昨日の我、否今の瞬間の我に對して前の瞬間の我も獨立の人格である。現在の自己が過去の自己を決定するのでもなく、過去の我が現在の我を決定するのでもない、その間に互に相限定するものがあつてはならない、若しさういふものがあつたならば人格的統一は成立しない。昨日の事實も絶對の事實であり、今日の事實も絶對の事實でなければならない、我々は各瞬間に於て獨立であればある程、一つの人格と考へられるのである、個人的人格の内にもカントの所謂目的の王國の意味がなければならない。互に獨立なるものゝ結合な

るが故にそれは直接と考へられ、却つて內面的統一と考へられるのである。人格とは主として理性的に行爲するものとして考へられるが、獨立なるものと獨立なるものとの直接の結合は愛といふものでなければならない、人格的統一の底にはかゝる愛の統一がなければならないかゝる愛の底から理性的行爲と考へられるものも起るのである。記憶と考へられるものは、かゝる意味に於ける自愛的自己のノエマ的限定と考へることができる、過現未を包む現在の自己限定として記憶といふ如きものが成立するのである。記憶に於ては非連續的の連續の意義がなければならない、分離的であればある程、記憶的に統一せられて居るといふことができる、記憶に於ては我々は個々の事實に從ふのであり、個々の事實に從へば從ふ程記憶は明であるのである。想像とか思惟とかに於ての如く何等かの意味に於てノエマ的に統一が見らるゝかぎり、それは記憶ではない。かゝる無統一の統一、そこに眞に內面的自己の統一といふものがあるのである、我々が眞に內面的自己の統一として記憶的統一と考へるものは分離的統一と云ふべきものである。內的感官と考へられるものは個々の事實を見るのである、それは眼なくして見る眼である。內的感官と考へられるものゝ尖端に於て我々は絕對に非合理的なるものに撞着するのである、絕對の否定

に撞着するのである。而もそこから蘇るのが想起である、かゝる否定の肯定として個々の事實が分離的に統一せられるかぎり、自愛的自己といふものが考へられるのである。更に自愛の意義が自卽他の他愛の立場にまで深められる時、愛によつて客觀的事實の世界が限定せられると考へることができる。アウグスチヌスがすべてが記憶に於てあると云ひ、廣大無邊の奥院 penetrale amplum et infinitum と云つたのも斯くして理解することができる。

我々は單なる事實といふものを考へる。そしてそれを非合理的と考へる、甚しきはそれ自身に何等の形式を有たない質料の如きものとも考へる。併し普通に事實と考へられるものでも、何時、何處でといふ樣に時間空間の形式に當て塡まつたものでなければならない。加之、少くとも經驗科學と考へられるものに於ては、我々は何處までも事實に從はなければならない、事實に合するといふことによつて知識の客觀性が立せられるのである。無形式にして單に非合理的と考へられる事實が如何にしてかゝる意義を有つことができるであらうか。我々に對して與へられると考へられるものは、何等かの意味に於て、我々の主觀との關係に於て與へられねばならない。盲に對して色は與へられない、聾に對して聲は與へられない、與へられるもの

は求められたものと云ふことができる。併し我々の視覺作用が色を生ずるのでもなければ、色が視覺作用を生ずるのでもない。色は色自身の體系を有つ、その體系と考へられるものは分類的體系といふ如きものであらう。併しそれが私に對して與へられると云ふには、卽ち私といふものと何等かの關係に入ると云ふには、それが自己自身を限定する意味を有たねばならぬ、少くも廣義に於て「有る」といふ意味を有つたものでなければならない、ヒポケーメノンの意味がなければならない。併しヒポケーメノンとして與へられるといふならば、それは我々の思惟に對して與へられると云ひ得るかも知らぬが、見る私に對して與へられるとは云へない。それは作用するものではない、作用するものと考へられるには、それが自己自身の內から無限に自己自身を限定して行くと考へられねばならない、一つの具體的一般者と考へられねばならない。併し斯く考へられた時、それが如何なる意味に於て私との關係に入るか。單に斯く考へられただけでは、そこに我々の視覺作用といふ如きものは考へられない。而も色の一般者の自己限定といふものを離れて視覺作用といふ如きものは考へられない。唯、一般者の自己限定として主語的方向に考へられるものを述語的方向に考へることによつて、卽ちヒポケーメノンを裏返すことによつて、視覺作用

といふ如きものが考へられるのである、場所の自己限定として意識作用といふ如きものが考へられるのである。それで我々に對して或物が與へられると云ふのは、我といふものがあり、或物といふものがあつて、後者が前者に對して與へられるのではなく、唯、無にして自己自身を限定するものがあると云ふことである、有るものが辨證法的に自己限定を限定するといふことでなければならない、その自己肯定の方向が物と考へられ自己否定の方向が我と考へられるのである、肯定的有に對する相對的無が我と考へられるのである。感覺がインデックスとして與へられると云ふのも、此の如き意味でなければならない。マールブルク學派のいふ如くそれが極微として單に生産點といふ如きものであつたなら、それから事實の世界、眞の實在の世界は構成せられない。共立 Compossible の世界が構成せられるには、それは自己自身に矛盾するものとして辨證法的に自己自身を限定するものでなければならない。無形式なる質料といふ如きものは與へられるといふ意味を有つことはできないのみならず、ギリシヤ哲學に於て考へられた如く單なる無と考へるの外ないのであらう。我々に與へられるといふことは、無の自己限定として無に於てあるといふことでなければならない。無の自己限定として無に於てあると云ふことが所與の形式と考

ふべきものである、その底には私の所謂圓環的限定の意義がなければならない。最も深い意味に於て所與の範疇と考へられるものは辨證法的でなければならない。之をそのノエマ的限定の方から見れば絶對に非合理的と云ひ得るであらう、併しノエシス的限定の立場から見ればそれは絶對に合理的と考へ得るであらう。非合理的なるが故に合理的、合理的なるが故に非合理的、そこに眞の辨證法的限定があるのである。所謂事實と考へられるものが非合理的として「我々に與へられる」といふには、非合理的卽合理的といふことを意味せなければならない。單に非合理的なるものは單なる質料といふ如くそれは何物でもない。それが我々に與へられるといふ時、それが合理的といふことを意味せなければならない。普通に合理的といへば單なる思惟といふものを考へる、而して之に對して非合理的なるものが與へられると考へる、併し眞に有るものとしては、單に非合理的なるものもなければ、單に合理的なるものもない、數學の如きものでも數學的直覺の事實に基くと云ふことができる。形式があつて內容が之に對して與へられるのでなく、形式と內容とは同時に與へられるのである。プラトンがパルメニデスに於て云つて居る樣に「有るもの」は何かに於てあると云はねばならぬ、「於てあるもの」に對して「於てある場所」が形式と考へられ

るのである。自覺に於て自己が自己に於て自己を見ると考へられる如く、一般者が自己に於て、自己に於てあるものを限定する。かゝる意味に於てすべて有るものは何かに於てあるのである。而して場所が場所自身を限定するといふ意味に於て、圓環的限定として場所自身が限定せられるかぎり、限定せられた場所が形式として與へられたものと對立する。そこに主觀と客觀との對立といふ如きものが考へられるのである、限定せられた場所といふものが主觀と考へられるのである。併し有るものは、いつも無の自己限定として無に於てあるものとして、それ自身を辨證法的に限定するのである、無卽有、質料卽形相なるが故に辨證法的となるのである、唯、辨證法的運動を包む愛の立場に於て辨證法的運動が止揚せられると考へられるかぎり、形式と與へられたものとが對立するのである。多くの哲學は無にして自己自身を限定する表現的自己の自覺的限定といふべき具體的なる辨證法的限定といふものから出立せないで、無媒介的なる場所の自己限定によつて考へられる抽象的なる主客の對立から出立する。而して無のノエマ的自覺といふべき理性を主觀と考へ、之に對して非合理的內容が與へられると考へる。併し理性によつて知識が限定せられると考へ、理性的限定が知るといふことであると考へるならば、それはもはや單な

る論理的限定といふ如きものではなくして、具體的一般者の自己限定といふ如きものでなければならない。而して眞の具體的一般者の自己限定といふべきものは、無の自己限定として辨證法的でなければならない。カント學派の人々は經驗の內容が空間、時間と論理の範疇とを當嵌つて經驗界が成立すると考へるが、その綜合統一によつて經驗界が成立すると考へられる意識一般と考へられるものは、私の考へる所では最も深い意味に於て內的知覺といふ如き意味を有つたものでなければならない。そしてそれは無にして自己自身を限定するものとして辨證法的に自己自身を限定するものと考へねばならぬと思ふのである、斯くしてそれによつて眞の客觀界が成立すると云ひ得るのである。斯く內的感官の自己限定によつて經驗界が成立すると考へ得るが、內的感官は辨證法的に自己自身を限定するものとして、固、行爲的意義を有つて居る、前に云つた如く未來より過去を限定する意味を有つて居る、無が有を包む意味を有つて居る。かゝる意味に於て有が無の中に沒したと考へられる時、卽ち辨證法的限定が場所自身の圓環的限定によつて包まれたと考へられる時、そこに我々がかゝる經驗界を考へる立場といふものが成立するのである。絕對無のノエシス的限定の立場卽ち愛の立場に於て辨證法的限定を包むと考へる立場に

於て、我々が客觀界を問題として之を考へ、之を知るといふことが可能となるのである。云はゞ意識一般を包む自己の立場に於て客觀界が我々に問題となるのである。カントは客觀界の成立の立場を明にした、併しそれが我々に問題となる立場について考へて居ない。さういふ立場は上に云つた如く時が失はれると考へられる表現的自己の自己限定の立場でなければならない。內的感官の對象として自己自身を限定すると考へられる事實と考へられるものが、絕對無の自覺のノエシス面に於てあると考へられる時「於てあるもの」に對立して「於てある場所」といふべきものは對立的意義を有するだけ、それだけ限定せられた場所の意義を有し、それが行爲的主觀と考へられる。絕對無の場所に於てあるものに對して對立的に限定せられる場所が行爲的主觀と考へられるものである、故に行爲的主觀と考へられるものは主觀の最後のものと考へることができる。かゝる意味に於て限定せられた場所の自己限定と考へられるものが、行爲的自己の自己限定と考へられるものであり、その自覺的內容がイデヤと考へられる。併し絕對無の場所に於てあるものに對し、對立的に考へられる場所といふものは何處までも行爲的主觀の意義を有つて居る、換言すれば行爲的主觀は何處までも「於てあるもの」を包む意味を有つて居る。かゝる主客對立の

極限に於て行爲的主觀はノエマ的には思惟と考へられ、ノエシス的に自由意志と考へられる。行爲的主觀と考へられるものが「對立的に限定せられた場所」として、もはや「於てあるもの」を包み得ざる時、尙何處までも包む意義を有するかぎり、それは自由意志と考へられ、それが包み得ると考へられるかぎり思惟と考へられる、後者のイデヤ的內容として眞理といふものが成立する。自己自身を限定する事實のノエシス的限定と考ふべき內的感官が行爲的意義を有するかぎり、所謂意識一般といふ如きものが考へられるのである。それで自己自身を限定する事實が我々に對して與へられると考へられる時、之に對して我々の主觀と考へられるものは行爲的主觀の意義を有つたものでなければならない。それはノエシス的には自由意志の意義を有つて居るが、ノエマ的には思惟の意義を有つて居る。與へられるものが後者に於てあると考へられる時、問題といふ意義を有つのである。かゝる意味に於てコヘンの如く與へられるものは問題として與へられるものであり、與へられたものは求められたものと云ふことができる。單なる形式的主觀と考へられるものは認識主觀の意義を有つことができないのみならず、かゝる主觀に對しては與へられるなどと云ふことも不可能であらう。自己に對して與へられるものは自己の內から與へられ

るものでなければならない。內的感官と考へられるものが右に云つた如く行爲的意義を有つ時、それは良心と考へられるものである。良心を有するものにして行爲の善惡が問題となる如く、理論的良心を有するものにして與へられるものが問題となるのである。理論的行爲的自己の自己限定として、之に於てあるものが問題となり、その自覺的內容が眞理となるのである。ウインデルバントがロッチェの言を引いて避くべからざる循環論證は已むなく之を犯さねばならぬといふ眞の意義も此に求められなければならない。理論的良心あるものにして知識が問題となるのである、眞の意識一般と考ふべきものは良心といふ如き意味を有つたものでなければならない。而して良心といふべきものはすべて爾なければならぬ如く、それは單に形式的と考ふべきものでなく、非合理的なるものゝ合理化として一面に創造的意義を有つてゐなければならない。範疇と考へられるものはそれが行爲的意義を有するかぎり、その綜合統一の形式と考へられるのである、卽ち於てあるものに對して限定せられた場所の自己限定の形式と考へることができる。

知識は認識主觀の綜合統一から始まると考へられる。併し私は知識は永遠の今の自己限定として事實が事實自身を限定すると云ふことから始まると考へるので

ある、卽ち分離的統一より始まると考へるのである。與へられたものは無形式なる雜多ではなくして、それぞれが絕對的に自己自身を限定するものでなければならぬ。それは統一を否定することによつて自己自身を統一するものでなければならない、そこには否定的統一といふ如きものがなければならない。かゝる統一が否定の肯定として辨證法的限定と考ふべきものであり、我々の知識は此に基礎附けられ、此に始まるのである。事實の命ずる所、我々は如何なる既成の形式をも棄てなければならない。我々の眞の自己といふものが絕對の無といふものであり、眞に有るものは絕對の無に於てあるとするならば、斯く考へざるを得ない。眞の自己の內的統一と考ふべきものは右の如き否定的統一でなければならない、卽ち辨證法的でなければならない。我々は我々に直接なるものとして主客未分の藝術的直觀の如きものを考へ、又はベルグソンの純粹持續の流の如きものを考へるが、それ等は既に射影せられた自己の統一に過ぎない。眞の直接なる內的自己の統一はノエマ的方向にあるのではなくしてノエシス的方向にあるのである、而してそれは場所的統一といふ如きものでなければならない。藝術的直觀の如きものでも、その底に事實が事實自身を限定するといふことがなければならない。所謂認識主觀と考へられるものは、か

ゝる場所的限定の自覺として、之に於て統一せる知識といふものが成立するのである。所謂認識主觀の綜合統一によつて知識が成立するといふより、寧ろ事實が事實自身を限定するといふことから認識主觀の綜合統一といふものが考へられるのである、凹面鏡に投射せられた光線が一つの焦點に集中すると一般である。無にして自己自身を限定すると考へられるかぎり、絶對無の空間は曲率を有つて居なければならぬ、之に於てあるものはそれ自身に於て統一せる一つの對象界を形成するのである。單なる事實といふものがあつて、形式が之を統一するのではない、自己自身を限定する今の自己限定として今が自己自身を限定することによつて、卽ち現實が現實自身を限定することによつて、認識形式が定まつて來るのである。感覺的內容として物理的事實が自己自身を限定することによつて、物理的認識の形式が定まつて來るのである。如何なる意味に於て今が今自身を限定するかによつて種々なる認識形式が定まつて來るのである。過現未を包む現在が自己の中に自己を限定する、その自己限定の焦點といふ如きものが所謂今といふものであり、それが時の自己限定であるかぎり、無にして自己自身を限定するものとして、その前後を照す光點の如きでなければならぬ、卽ち自己自身を限定する今でなければならぬ。かゝる自己限

定が最も深い意味に於て內的感官と考へられるものである。記憶なくして內的感官といふものはない、內的感官は過去を包む意味を有つて居る。普通に斯く記憶的なる內的感官によつて所謂內界と考へられるものが限定せられると考へられるが、それでは單に可能的なる時が限定せられるまでゞあり、眞に自己といふものは見られない。眞の內的感官はコギトウ・エルゴ・スムとして、作用が作用自身を見る意味がなければならない。斯くして始めて我々の自己が時の前後を包むと考へることができる。アウグスチヌスの如く我々は記憶することを記憶し、記憶も記憶に於てあると云ひ得るのみならず、忘れることも記憶に於てあると云ふことができる。かゝる內的感官の直觀によつて所謂內部知覺の事實といふものが限定せられるのである。併し無の自己限定としての內的感官の限定によつて、所謂內的事實の世界が成立するとするならば、內的感官は既に外的感官の意義を有つたものでなければならない。自己を見るものは自己を越えたものでなければならない、永遠の今の自己限定として感官と考へられるものには、固內外といふものはないのである。無の自己限定として非合理的なるものに撞着するといふ意味に於ては、却つてすべて外的とも考へることもできる。かゝる外的感官にまで記憶的意義を附加すればアウグス

チヌスの如くすべてが記憶に於てあると云ふことができ、又プラトンの如く知ることは想起であるとも考へることができる。感官とは固、無の自己限定面といふ如きものであつて、內的事實の世界といふ如きものは、かゝる限定面に於て一つの中心を有つた限定せられた圓といふ如きものに過ぎないであらう。かういふ意味に於ては感官といふのは理性的と考へられるが、非合理的なるものが卽合理的であるといふ良心といふのは一般に良心といふ如き意味を有つたものと考へることができる。ことが良心的直覺といふことである、直覺的なるものが直に立法的であることが良心の聲と考へられるものである。單に理性的なるものにも、又單に非理性的なるものにも、良心の聲といふものは聞かれない。非合理的なるものゝ底に聞える理性の聲、肉の底に聞える靈の聲が良心の聲である。良心の聲に從ふといふのは單に理性的となることではなく純なる情意の要求に從ふことでなければならない、唯、考へられた自己を棄てることである、私欲を離れることである、無にして自己自身を限定するものとなることである、永遠の今の自己限定の內容は廣義に於て良心の聲として現れるのである。良心的直覺といふ如きことは從來、單に行爲についてのみ考へられたが、直證的知識については云までもなく、物理的知覺の如きものであつても、それ

が立法的意義を有するかぎり、それは良心的意義を有つたものでなければならない。物理學者は何處までも物理的事實の良心的直覺に從はなければならない、之が爲には如何なる理論も棄てなければならないのである。オンに對してメ・オンが立つのではない、メ・オンに對してオンが立つのである、我々の自覺はオンの方にあるのではなくしてメ・オンの方にあるのである。知識成立の根柢には絶對に非合理的なるものゝ合理性といふものがなければならない、良心の聲は神の聲である。かゝる意味に於て絶對無の場所に於てあるものに對して、相對的に限定せられた場所にして何處までも之を包む意義を有つたものが、知的主觀と考へられるものである。而して斯く限定せられた場所が同時に限定する場所の意義を有するかぎり、所謂直證的知識といふ如きものが成立するのである。

我々の知識の世界は理論的良心によつて、藝術的世界は藝術的良心によつて、道德的世界は道德的良心によつて成立する。その底にはいづれも事實が事實自身を限定するといふ意味がなければならない、永遠の今の自己限定の意味がなければならぬ。而してそれは絶對無の自己限定として、卽ち絶對に非合理的なるものゝ合理化として、ノエシス的には絶對の愛といふ如きものでなければならない。愛に於ては、

我々は自己を否定することによつて自己を肯定するのである、死することによつて生きるのである、愛は非合理的なるものゝ合理化といふべきである。ケエルケゴールの云ふ如く眞の愛は義務であり、良心の事であると云ふことができる。事實が事實自身を限定する瞬間の自己限定に於て、永遠の今の自己限定として、永遠なるものに觸れる所に、良心的直覺があり、絶對的愛の包容があるのである。而して絶對愛の立場に於て辨證法的なるものを包むと考へられるかぎり、永遠の價値の世界卽ちイデヤの世界が見られるのである。神の立場に立たざるかぎり我々は辨證法的なるものを包むと云ふことはできない。絶對無の場所に於てあるもの卽ち辨證法的に自己自身を限定するものに對して、限定せられた場所が對立すると考へねばならない。かゝる場所的限定の內容としてイデヤ的なるものが見られるのである。併しかゝる對立的に限定せられた場所の立場卽ち所謂行爲の立場は固、辨證法的に自己自身を限定するものを包むといふ意義を有しながら之を包むことができない。唯、何處までも之を包むといふ意義を有するかぎり、その極限に於てノエマ的に意識一般といふ如きものが、考へられ、ノエシス的に道德的主觀といふ如きものが考へられるのである、而して之を包み得るかぎり藝術的主觀といふものが成立するのである。

併し此等の主觀の世界はそれ自身に於て成立して居るのではなく、その底に辨證法的に自己自身を限定する感覺と愛との世界がなければならない、卽ち事實が事實を限定するといふ事實の世界のあることを忘れてはならない。